

# 鄉愁

龍虫

## 似顔絵

---

私は笑顔を見ている、幼げな笑顔は、女人に特有の人相から滲み出る雰囲気以前の何もない状態のまるで保育園での1歳から3歳くらいの園児のような笑顔である。保育園にはいろいろな遊び道具がある。シャベルやジョウロなどが

無造作に外に置いてあるのが印象的だろう。それがどうしたというわけではない。そのような他愛もないことからストーリーが展開していくのだろうということなのだろう。消えてはまた思い出し、又消えては又思い出し、その繰り返しが頭の中で行われているというのも記憶という能力があるからなのだろう。

## 大きな入口

---

私は大きな入口を見た。そこから中に入る前から、その内部の情景が胸から出てくるのだった。永遠に回り続ける人々。誰も人々同士傷つけない。食べなくてもいいのだろう。だから心配がない。新幹線、アトラクション、精神が開花した人々はコミュニケーションは浮かぶ文字で行われる。それが誰が浮かせたのかとか誰も興味はない。そんなことよりも、日が落ちることのないこのような街では、行動することが当たり前なのである。私にはいろいろな情景が浮かぶ。外に出しているパン屋さんや、中でやっているおもちゃ屋さん、楽しげに会話するということはない。ただお互いを害せず生きているということ。なぜお互いを害せずというような表現をしたのかというと、郷愁はそのようなものであり、そのようなものなど他愛もないということなのであり、順々に郷愁は深い深い輝きへと人々を誘うのであります。

## 川辺で座り込んで見ているもの

---

私は風景を眺めています。川や子供たちや遊び道具や後ろの木々や風など。服装を気にしだしました。今日の服装を気にしています。急に焦り出しました。プラネタリウムを見よう。自転車を漕いで元来た道に戻り、足早に疑似の星々を見ました。その後の帰り道、また寺に帰らなくてはいいけない。門をくぐればもう地下の駐車場に自転車を止めて寺の中に入らなくてはいいけません。当たり前のようにして日が暮れたのもあって我が寺に帰りました。

## 緑の並木道

---

私は歩いています。びっくりするくらい和やかな暖かい日、私は緑の並木道を歩きました。風や木々や懐かしい人々、もしかしたらここは楽園なのではないか？不思議な気持ちにもなり、自然と一体になった気分であります。別に誰と話すわけでもない。話せれば尚良いのだが、この頃は大人しくて、恥ずかしがりやな私には到底できないことでした。それだけです。

カプセルに入った私は眠っていました。またの名を永眠と言います。みんな花束を私に置いていました。肉体というものを持ってない彼ら彼女らは永遠に私に会えないことを素直に悲しんで、花束を授けていたのです。その頃私は生まれ変わってこの厳しい娑婆にいます。しかし永眠したはずの私が目を覚ましました。人々は驚き、そのあとに喜び私を出迎えてくれました。みなさんが見ているこの著者は、もう我がなくて召使いのようになっていることでしょう。私はここに戻りたくて一生懸命に言葉を出していました。ようやくそれが実って私は今ここにはいないのです。

密教でいう即身成仏の意味が分かってきました。私は即身成仏して仏陀に戻ったのでした。この娑婆には仮りに菩薩という肉体で生まれてきたのでした。